

人間と死 歌詞

訳詩 柴田南雄 柴田純子

構成 柴田純子

プロローグ「人生の短さについて」

おゝ、パウリヌスよ、大多数の人びとは、母なる自然が、人間に須臾（しゅゆ・ルビ）のいのちしか与えなかったと嘆いている。賢者アリストテレスさえも自然にむかって抗議している。「けものたちには気前よく、長居一生を与えておきながら、人間の命を、数多（あまた・ルビ）の大いなる事柄のために生み出された人間のいのちを、かくも短く限ってしまった」と。

歳月はひたすら歩みつづける。ひとつの道をまっすぐに、立ちどまることもなく、音もたてずに歩みつづける。速さを人に告げもせず、フェルトの足で歩みつづける。知らぬうちに人生は過ぎ去り、死が姿をあらわすのだ。

（セネカ 柴田純子 訳）

第I章 A:「マルテの手記」より

クリストフ・デトレフの「死」は、すでに何日もまえからウルスゴールの村に住み、村人たちに話しかけ、要求し、命令した。

自分がかついで行け、青い部屋に、小部屋に、広間に、といった。犬をつれて来い、笑ってみろ、話をしろ、遊ぶのだ、しずかに。友達に会いたい、と女や死んだやつの名を口に、早く死にたいと言った。

しかも夜ふけに、看病に疲れた人達が休もうとすると、クリストフ・デトレフの「死」は、大声で叫び、うめき、しつこく吠えつづけた。

クリストフ・デトレフの「死」は、この村に70日間とどまった。その間彼は、国王のようだった。後世に暴君と渾名された国王とそっくりだった。

（R.M.リルケ 柴田南雄 訳）

B:宮沢賢治「青森挽歌」より

とし子はみんなが死ぬと名づける

そのやり方を通して行き

それからさきどこへ行ったかわからない

それはおれたちの空間の方向ではかられない

感ぜられない方向を感じやうとするときは

だれだってみんなぐるぐるする
《耳ごうど鳴ってさっぱり聞けなくなったんちゃい》
そう甘えるように言ってから
たしかにあいつはじぶんのまわりの
眼にははっきりみえている
なつかしいひとたちの声をきかなかった
にわか呼吸がとまり脈がうたなくなり
それからわたくしがはしって行ったとき
あのきれいな眼が
なにかを索（もと・ルビ）めるように空しくうごいていた
それはもうわたくしたちの空間を二度と見なかった。
（宮沢賢治）

C：「ソレアの唄」

あいくちが心臓につきとおる。
荒れ野をたがやす鋤（すき・ルビ）の刃のように
やめろ、おれを刺すな、やめろ！
あいくちが太陽の光のように
おそろしい、その窪（くぼ・ルビ）みを焼きつくす。
やめろ、おれを刺すな、やめろ！

死んでいた。通りのまんなかで
あいくちを胸に刺（さ・ルビ）したまま。
誰もその男を知らなかった。
なんとあかりが揺れたことか！
かあさん。通りのあかりが
なんとまあ揺れていたことか！

世明けだった。硬い空気にむかって
見開いている二つのまなこを
誰ひとり、のぞきこむことができなかつた。
死んでいたのだ。通りのまんなかで
あいくちを胸に刺したまま。
そして、誰もその男を知らなかった。
（F.G. ロルカ 柴田純子 訳）

第Ⅱ楽章 IA : デイエス・イレ

Dies iræ, dies illa,
Solvat sæclum in favilla:
Teste David cum Sibylla.

Quantus tremor est futurus,
Quando judex est venturus,
Cuncta stricte discussurus!

Tuba mirum spargens sonum
Per sepulcra regionum,
Coget omnes ante thronum.

Mors stupebit et natura,
Cum resurget creatura,
Judicanti responsura.

Liber scriptus proferetur,
In quo totum continetur,
Unde mundus judicetur.

Judex ergo cum sedebit,
Quidquid latet apparebit:
Nil inlutum remanebit.

Quid Sum miser tunc dicturus?
Quem patronum rogaturus?
Cum vix Justus sit securus.

Rex tremendæ majestatis.
Qui salvandos salvas gratis,
Salva me, fons pietatis.

Recordare Jesu pie,
Quod sum causa tuæ viæ:
Ne me perdas illa die

Quærens me, sedisti lassus:
Redemisti crucem passus:
Tantus labor non sit cassus.

Juste judex ultionis,
Donum fac remissionis,
Ante diem rationis.

Ingemisco, tanquam resus:
Culpa rubet vultus meus:
Supplicanti parce Deus.

Qui Mariam absolvisti,
Et latronem exaudisti,
Mihi quoque spem dedisti.

Præces meæ non sunt dignæ.
Sed tu bonus fac benigne,
Ne perenni cremer igne.

Inter oves locum præsta,
Et ab hædis me sequentra,
Statuens in parte dextra.

Confutatis maledictis,
Flammis acribus addictis,
Voca me cum benedictis.

Oro supplex et acclinis,
Cor contritum quasi cinis:
Gere curam mei finis.

Lacrimosa dies illa,
Qua resurget ex favilla
Judicandus homo reuc:

Huic ergo parce Deus.

Pie Jesu Domine,

Dona eis requiem. Amen.

ダビッドとシビッラの予言のとおり、
この世が灰に帰すべきその日こそ、
怒りの日である。

審判者が、すべてをおごそかにただすために
来給うとき、人々のおそれは
いかばかりであろうか。

この世の墓の上に、不思議なひびきを伝える
ラッパが、全人類を王座の前に
集めるであろう。

人間が審判官に答えるために
よみがえるとき
死と自然界はおどろくであろう。

そのときこの世をさばくすべてのことを
書き記されている書物が
もち出されるであろう。

審判官が裁きの場につくとき、
かくされたことはことごとく知られ、
あらゆることが裁かれるであろう。

そのときあわれな私は、何を言おうか。
どんな弁護官に頼もうか。
義人さえも不安をもつであろうのに。

おそろべき御稜威（みいつ・ルビ）の大王よ、
救われるものを恩恵みをもって救いたまう
あわれみの泉よ、私をも救い給え。

慈悲深きイエズス、
地上に御身が下り給うたのは、私のためでもあった。
その日、私を滅ぼし給うな。

私をさがし求め、
十字架の刑をもって私をあがまに給うた
御者よ、その苦勞を空しく給うな。

正義によって罰し給う裁判官よ、
報告すべき口より先に
私にゆるしの恩寵（おんちょう・ルビ）をください給え。

私はとがあるものとして嘆く。
罪をはじてかおを赤らめる。
神よ、こい願う私をゆるし給え。

私の祈りはききいれられる価値のないものであるが、
慈悲深き御者よ、あわれみをもって、
私を永遠の火に追いやり給うな。

羊の中に私を置き、
牝山羊から引きはなし、
御右に置き給え。

呪われたものどもを罰し、
はげしい火の中に落とし給うとき、
私を選ばれた者の一人として招き給え。

灰のようにくだかれた心を持って、
ひれ伏して願ひ奉る、
私の終わりのときをはからい給え。

罪ある人がさばかれるために、
塵から甦るその日こそ
涙の日である。

願わくば神よ、かれをあわれみ給え、
主よ、やさしきイエズスよ、
かれら全てにやすみを与え給え。アーメン。

IB：「父の死を悼（いた・ルビ）む歌」

まどろむ魂よ、目覚めよ、精神をはげまして、
しかと見つめるのだ。
人生が過ぎ去るさまを、沈黙のうちに死が近づくさまを。
喜びの遠ざかる速さを、思い出のあとに苦しみが続くことを。
過ぎた時すべてが、われらが目によきものとうつることを。

われらが人生は流れゆく川、死の海原に注ぎこむ。
かしこへ、力ある者どももひたすらに向かう。すべての終りへと。
かしこへ、滔々（とうとう・ルビ）たる大河も、おだやかな流れも、か細いせせらぎも、
ひとしなみに、流れこむ。貧しい者も富める者も、ひとしなみに集められる。

この世界は、今ひとつの世界、苦しみなき館へと至る道。だが、一日の道のりを間違いなく進むためには、心確かでなければならぬ。

生まれおちたとき、われらは出発し、生きている限り歩み続け、いのちが終わるときに到り着く。

かくして、われらは死ののち安らう。

（J.マンリーケ 柴田純子訳）

II A：声明と「理趣経」

大楽金剛不空真実三摩耶経

如是我聞

一時薄伽梵成就殊勝一切如来金剛加持三摩耶智已得一切如来灌頂宝冠為三界主已證一切如来一切智智瑜伽自在能作一切如来一切印平等種種事業於無尽無余一切衆生界一切意願作業皆悉円満常恒三世一切時身語意業金剛大毘盧遮那如来在於欲界他化自在天王宮中一切如来常所遊處吉祥称歎大摩尼殿種種間錯鈴鐸繪幡微風搖擊珠鬘瓔珞半満月等而為莊嚴与八十俱
★菩薩衆俱所謂金剛手菩薩摩訶薩文觀自在菩薩摩訶薩虚空蔵菩薩摩訶薩金剛拳菩薩摩訶薩文殊師利菩薩摩訶薩★発心転法輪菩薩摩訶薩虚空庫菩薩摩訶薩摧一切魔菩薩摩訶薩与如是等大菩薩衆恭敬圍繞而為説法初中後善文義功妙純一円満清浄潔白説一切法清浄句門所謂妙

適清浄句是菩薩位慾箭清浄句是菩薩位触清浄句是菩薩位愛縛清浄句是菩薩位一切自在主清浄句是菩薩位見清浄句是菩薩位敵悅清浄句是菩薩位愛清浄句是菩薩位慢清浄句是菩薩位莊嚴清浄句是菩薩位意滋澤清浄句是菩薩位光明清浄句是菩薩位身樂清浄句是菩薩位色清浄句是菩薩位声清浄句是菩薩香清浄句是菩薩位味清浄句是菩薩位何以故一切法自性清浄故般若波羅蜜多清浄金剛手若有聞此清浄出生句般若理趣乃至菩提道場一切蓋障及煩惱障法障業障設広積習必不墮於地獄等趣設作重罪消滅不難若能受持日日讀誦作意思惟即於現生證一切法平等金剛三摩地於一切法皆得自在受於無量適悦歎喜以十六大菩薩生獲得如來執金剛位時薄伽梵一切如來大乘現證三摩耶一切曼荼羅持金剛勝薩埵於三界中調伏無余一切義成就金剛手菩薩摩訶薩為欲重顯明此義故灑怡微笑左手作金剛慢印右手抽擲本初大金剛作勇進勢説大樂金剛不空三摩耶心

時薄伽梵毘盧舍那如來

時調伏難調積迦牟尼如來

薄伽梵得自性清浄法性如來

理趣經 初段 大意

このように、私は聞いた。——あるとき、世尊は、一切の如來のもつ力と数々の智慧をすべて身につけ、金剛のようにすぐれた境地に到達した。あらゆる如來の智慧をそそがれた空冠によって浄められ、この世の完全な支配者となっただけでなく、一切の如來のすべてを知る最高の智慧を得て、こころとからだの完全な自由を得た偉大な行者となった。

『一切の如來の蜜印とすべての教えとは同じである』——このことを完全に知って、それを象徴する数々の行いを示した。かくして、世尊は、人の世における一切の願いをことごとく満たし、そのからだ、ことばと、こころの三つのはたらきは、過去、現在、未来を超えて永遠にとどこおることがない。

かくして、この偉大な憐れみのこころをもつ世尊は、大日如來とよばれすべての如來の常に遊ぶ他化自在天の王宮に逗留している。宮殿には美しい宝石が敷きつめられ、さまざまの色の絹の幡が吊られ、それに張られた鈴は風に揺らいで、すずしい音色をたてていた。半月や満月のような形とりどりの飾りがきらめいていた。如來はそこで、数多くの菩薩衆にかこまれ、教えを説いた。

それは、『すべてのものはみなきよらかである』という教えである。すなわち、●男女の交わりのたえなる恍惚境、それも実に菩薩の境地である。●相手を欲しいと思う心、それも実に菩薩の境地である。●触れあって喜ぶ心、それも実に菩薩の境地である。●愛樂に満ちたりた自由な心地、それも実に菩薩の境地である。●ひとめ惚れの楽しい心地、それも実に菩薩の境地である。●愛撫の悦び、それも実に菩薩の境地である。●恋い焦がれる心、それも実に菩薩の境地である。●自分のものにした満足感、それも実に菩薩の境地である。●美化する心、それも実に菩薩の境地である。●悦ばせるいたわり、それも実に菩

薩の境地である。●見つめあう悦び、それも実に菩薩の境地である。●肉体のすあらしい快感、それも実に菩薩の境地である。●姿を喜ぶ心、それも実に菩薩の境地である。●声を喜ぶ心、それも実に菩薩の境地である。●味を喜ぶ心、それも実に菩薩の境地である。

それは何故か。この世のすべてのものは、実にその本性がきよらかだからである。それゆえ、心の眼をひらき、すべてのものをあるがままに眺めるならば、真実の知恵★智恵でなく？★のきよらかな境地に到達するであろう。

金剛手よ、このきよらかな境地に導く真実の知恵を感性する方法をひとたび聞かされたならば、すべての生涯はなくなり、さとの壇に上がることができよう。この教えを身にたもち、日々に唱え、一心に念ずるならば、この世に生きたままで、この世に存在する一切のものが平等であることをさとる、金剛のように堅固な境地を得て、この世の一切のものから解放されて自由となり、無上の歓喜を味わえよう。そして十六大菩薩の段階を経て、大日如来となり、金剛薩埵としての位を得ることができよう。

かくて世尊は、一切の如来の偉大なさとりを晶子不してあらわす曼荼羅の中で最もすぐれた者となった。金剛手菩薩は、かさねてこの教えをあらわすために、顔に微笑を浮かべて、左手に金剛慢の印を結び、右手に一切の根元を象徴する大金剛杵をなげうって勇み立ち、大樂が金剛のように堅固で常に実現することを願う一時真言『吽』を唱えた。

(日本フォのグラム発売：アルバム『密教——阿字観瞑想』解説書より)

ⅡB：「梁塵（りょうじん・ルビ）秘抄（ひしょう・ルビ）口伝（くでん・ルビ）集、巻十」より

其の後、仁和（にんな・ルビ）寺理趣三まいにまいりて候（そう・ルビ）らしほどに、二月十九日、はやくかくれにし由を聞かしかば、哀れさ限りなく、よのはかなさ、後れ先立つ此世の有様、今に始めぬ事なれど、思いにつづけられて、あしたには懺法（せんぼう・ルビ）を讀みて六根を懺悔（ざんげ・ルビ）し、夕には阿弥陀経（あみだきょう・ルビ）をよみて西方の九品（くほん・ルビ）往生を祈る事、五十日つとめ祈りき。

一年が間、千部の法花（ほけ・ルビ）経読み畢りて、次の年の二月十九日、歌をこそ経よりもめでしかと思ひて、あれに習ひたりし今様、むねとある、うたひて後、はてに長歌を歌ひて、後世（ごせ・ルビ）のためにとぶらひき。

それもしらで、さとにある女房丹波夢に見るやうは、わが歌をうたひけるを、五條あま、白きうすぎぬに足をつつみて参りて、障子（そうじ・ルビ）のうちにて、この御哥をききに参りたるとて、長歌を聞いて、是（こ・ルビ）はいかがと覺束（おぼつか・ルビ）なく思ひ候。げにめでたさよ。これを承り候へば、身も涼しく嬉しきと見て、兩三日ありて、かくみえ候つる由を、女房参りて申す。

さは聞きけるにや。

其の後、其日は必ずうたひて後世をとぶらふなり。

第Ⅲ章 「幽冥礼讃（ゆうめいらいさん・ルビ）」より

わたしは生きている、明るいおぼろな形の間で。

まだ闇に沈まない形の間で。

デモクリトスは考えるためにおのが眼をくり抜いた。

時はわたしのデモクリトスとなった。

この薄明（はくめい・ルビ）はゆるやかで、痛みもない。

おだやかな傾斜を流れて、

そして永遠に良く似ている。

南から、東から、西から、北から、

私を導いてきた道が一点に集まる。

私の秘密の中心に。

それらの道を、研（こだま・ルビ）が、歩みが、女たちが、男たちが、

末期（まつご・ルビ）の苦しみが、復活が通って行った。

昼と夜、夢の切れ目と夢、

過ぎ去った日の、そして、世界中の過ぎ去った日々の、

いちばんくだらない一瞬一瞬が行った。

デーンびとの鋼（はがね・ルビ）の剣（つるぎ・ルビ）、ペルシアの月、

死者たちの儀式、ともに分かった愛、言葉の数々、

エマソンや雪や数多（あまた・ルビ）の事ども。

いまやすべてを忘れられる。わたしはやがて迎いつく。

わたしの中心に、わたしの代数に、

わたしの鍵に、わたしの鏡に。

まもなくわたしは知るだろう。わたしが誰であるのかを。

（J.L.ボルヘス 柴田純子訳）